

# STI for SDGs についての日本アフリカ大臣対話

## ○ 開催概要

1.開催日: 令和元年 8 月 28 日(水曜日)

2.開催地: 横浜

3.主催: 文部科学省

共催: 科学技術振興機構(JST)、日本学術振興会(JSPS)、日本医療研究開発機構(AMED)、国際協力機構(JICA)

4.アフリカ側参加国・機関: アンゴラ、ウガンダ、エジプト、エチオピア、ガボン、カメルーン、ケニア、コンゴ共和国、ジンバブエ、セネガル、チュニジア、ナイジェリア、マリ、南アフリカ、モザンビーク、ルワンダ、レソト(17 カ国)、アフリカ連合(AU)

※出席者リスト(別紙)

5.日本側出席者: 柴山文部科学大臣、山脇文部科学審議官、岸外務大臣科学技術顧問、中村国連「10人委員会」メンバー、松尾内閣府政策統括官、里見日本学術振興会理事長、濱口科学技術振興機構理事長、鈴木国際協力機構副理事 他  
(役職名は開催当時)

## ○ 結果概要

本対話会合は、柴山文部科学大臣、岸輝雄外務大臣科学技術顧問、アグボール AU 人的資源・科学技術委員による冒頭挨拶の後、セッション1(STI for SDGs に関する動向・政策の紹介)、セッション2(日アフリカ科学技術協力の優良事例の紹介)、セッション3(意見交換)の三部構成で行われた。開催にあたっては、外務省・内閣府とも連携し、日本政府全体として、日アフリカ間の STI for SDGs 協力を推進していく姿勢をアフリカ諸国に示した。

### **冒頭挨拶**

柴山大臣は、アフリカのAGENDA2063や国連の持続可能な開発目標(SDGs)を達成するためには、STI for SDGsや人材育成が重要であることを述べるとともに、本会合にて日アフリカ共同研究の優良事例や協力の深化に向けた施策等を共有し対話を進めることで、日アフリカ連携が更に促進され、日本がアフリカの自己改革のより良きパートナーとなっていくことへ期待を示した。

続いて岸顧問は、科学技術外交推進会議が策定したTICAD7に向けた提言を紹介し、日本はSTIをもって地球規模課題の解決に貢献すべきであり、アフリカ諸国と共に考え、イノベーション・エコシステムを構築していくべきであると述べた。

アフリカ側を代表するゲストとして参加したアグボールAU委員からは、経済、教育、科学技術の振興にあたってはイノベーションが求められており、その中で日本との連携は重要であるとの発言があった。また、気候変動や感染症等のグローバル・チェーンで考えるべき課題に対し、STIで何ができるかについて意見交換することの重要性についても言及があった。

### **セッション1 (STI for SDGs に関する動向・政策の紹介)**

日本側から国際社会及び日本国内の STI for SDGs の動向について説明したあと、アフリカ側からは国連の STI for SDGs ロードマップのパイロット国の1つであるケニアから、策定中である STI ロードマップについての紹介があった。続いて、文部科学省の高等教育及び科学技術・学術研究における日アフリカ協力や、本年9月に開始予定の地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)の次期公募(令和2年採択分)において、科学技術外交推進会議が策定した TICAD7 に向けた提言を受ける形で、アフリカとの ICT を活用した共同研究の提案を奨励する予定であることが紹介された。また、JST と南アフリカ国立研究財団(NRF)から、日本・南アフリカを軸とした日アフリカ共同研究を推進する新たな枠組み(AJ-CORE: Africa-Japan Collaborative Research)の公募を本年秋頃に開始することを発表した。

人材育成・キャパシティビルディングの観点においては、エジプト日本科学技術大学(E-JUST)をはじめとする JICA のアフリカにおける科学技術分野の人材育成の取組みや、日本数学会とアフリカ数理科学研究所(AIMS: Africa Institute of Mathematical Sciences)の若手人材育成にかかる協力についての紹介がなされた。さらに、エジプトからアフリカ・アラブ諸国の AI 教育・研究・イノベーションを牽引していくことも目指した自国の AI 政策についての発表が行われた。

### **セッション2 (日アフリカ科学技術協力の優良事例の紹介)**

日アフリカの研究者によって STI for SDGs の優良事例として2つのプレゼンテーションが行われた。まず、名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所(ITbM)の研究チームとケニア農業・畜産研究機構(KALRO)より、食糧問題解決への貢献が期待される寄生植物ストライガの撲滅研究について、ケニアの圃場における実証試験の状況を含めた紹介がなされた。次に、長崎大学熱帯医学研究所と南アフリカ・機構地球システム科学応用センター(ACCESS)から、共同で開発し、南アフリカやモザンビークにて社会実装が進む、気候予測を基にしたマラリア早期警戒システムについて紹介するとともに、本システムのアフリカ他地域への適用や農業分野などの別分野への応用の可能性についても言及した。

### **セッション3 (意見交換)**

上記2つのセッションを受け、今後の日アフリカの科学技術協力の推進に向けた意見交換が行われた。出席したアフリカの大臣からは、「本会合を通じて SDGs の達成における科学技術の重要性を認識した。」「SDGs に関する科学技術分野の取組は、成果が最大化されるよう、アフリカ諸国間でも連携すべき。アフリカ各国における日アフリカ協力についての情報共有がなされることを期待する。」「SDGs 達成に向けた人材育成や日アフリカ間の人的交流促進についての日本の支援を期待する。」といった発言があった。

### **閉会挨拶**

最後に柴山文部科学大臣より、日アフリカの共同研究成果の優良事例の各国での展開の可能性や、日アフリカの協カツールの活用の検討を呼び掛けた。また、本対話会合を契機として、文部科学省としても、SDGs に係る研究成果を梃とし、研究者、民間企業、各国政府の関連省庁などの多様なステークホルダーが協調・連携していくような活動を後押しすることにより、日アフリカ協カに面的な広がりを持たせ、SDGs 達成に向けて貢献していきたい旨を述べ閉会した。